

陳舜臣さんを語る会通信

NO.100 Mar. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2023年3月10日

http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

中国の山河、旅、身辺雑記、交友、料理ほかエッセイ49編『含笑花の木』

本号で紹介する『含笑花の木』(1989.11)は、前号の『雲外の峰』(1989.3)と、同じ年に刊行されたエッセイ集で、出版は、ともに二玄社です。お楽しみ下さい。(編集委員 橘雄三)

『含笑花の木』(二玄社)「あとがき」(最後の三行削除)

小見出し、傍線は編集委員の加筆

本書誕生のいきさつ

この十年ほどのあいだに私の書いたエッセイは、シリーズものを除いて、ほぼ単行本二冊分になる。これは二玄社の宇和川準一氏に拾い集めていただいていたのであり、私にしてみれば、その多さがやや意外であった。

ことしの三月に出版した『雲外の峰』がその第一集にあたり、歴史、美術、日中関係などがおもなテーマであった。

第二集に相当するのが本書であり、中国の山河、旅、シルクロード、身辺雑記、交友、回顧、料理、政治雑感その他まで含む。それぞれが独立したエッセイであり、なにもこんなふうに分類して出版することを計画したのではない。

題名「含笑花の木」及び内容

このようなエッセイ集は、できるだけ初出の文章をそのまま収録すべきだというのが私の意見である。本書もその原則に従ったが、初出時のあきらかなまちがいは、直しておいた。タイトルとなった「含笑花の木」の初出では、その名を日本語でどう呼ぶのか知らないが云々と書いてい



二玄社版表紙

るが、あとで名前がわかったので、それを書き加えた。

随筆ということばは、筆にまかせてという意味であり、これは無責任ではなく、ただ書くほうも読むほうも、リラクソスの姿勢でありたいとおもう。

あらためて読み返してみると、「答礼宴にて」に登場した中国の文学者のうち、丁玲、周揚、李季の三氏がすでに他界している。最近の新聞に文化相の王蒙氏が辞職し、後任に賀敬之氏が任命されるという記事がのつていた。答礼宴に出席して、私の妻と語り合った女流作家の柯岩さんは、その賀敬之氏の夫人である。あのときの宴も、歴史の頁に書きこまれ、その上にすでに新しい頁が重ねられたという気がする。

本書は平成元年に編まれるわけだが、元号がきまったときに、共同通信社に請われて書いた「平成雑感」は、一つの時代の記念であろう。

平成元年秋 三燈書室にて

陳舜臣

母のにおいにつながる含笑花の香り

本書の題名になった収録作品「含笑花の木」より抜粋転載します。

終戦の翌年であったか、身なりはよくないが、人品いやしからぬ人物が、含笑花の取り木を売りに来た。当時、焼跡には、世が世であれば、とといったかんじの人がときどき目についたものである。かなりの値段であったが、家内の父がそれを買った。

売りにきた人物は、空襲で焼けて廃墟となつたある外人の邸の庭に、その樹が生きのびているのをみつけて、取り木したと正直に語った。十四年前、私が六甲

に引越したとき、

また取り木をして植え、無事に根がついて現在にいたっている。花が咲く



『含笑花の木』巻頭画像より

と、そのあたりに甘つたるく、またやわらかいかんじの香りがただよう。母が亡くなったあと思いついたのだが、私が含笑花の香りを好むのは、それが母のにおいだったからかもしれない。その季節になると、母はいつも含笑花を髪に挿したり、ハンカチに包んでそばに置いたりしていたものである。おそらく私がまだ物心のつかないころから、母はそうしていたのであろう。いつのまにか、私はそれを母のにおいだと思ひこんでしまったようだ。(p.220-221)

『含笑花の木』 各編内容 (I) 及び補足

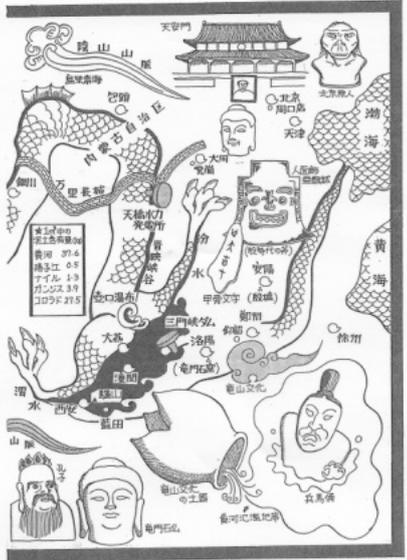
I	千変万化のくに	中国はさまざまでありながら、同時に一つ
	歴史のみこむ母なる流れ	冒頭、「黄河千年一清」ではじまる
	黄帝陵を訪ねて	黄帝は「三皇五帝」の五帝の筆頭。その陵墓(衣冠塚?)は陝西省延安市黄陵县にある
	泰山のこと	山東省泰安にある名山。古来、天子がここで封禪の儀式を行ってきた
	黄山の興(きょう)	安徽省南部にある奇峰。中国画人のメッカ
	シルクロードの魅力	その魅力は、さまざまな想いを、つぎつぎと泉のように湧き出させ、精神を深めてくれる+α
	西域との再会	1973年に新疆のウルムチほか、75年に敦煌、77年に新疆のカシュガルほかを訪問
	キジル千仏洞	新疆ウイグル自治区クチャ(庫車)の近辺にある石窟寺院群の一つ
	西域南道	「私は玄奘の息吹きを肩のあたりにかじながら、この地を旅した」
	ふしぎな系のつながり	このエッセイには、「アラムトをゆく著者一行」という写真が一葉ついている
イスタンブールでおもったこと	「世界が結ばれているということが、これ以上あざやかに象徴されているまちは、他にない」	

歴史のみこむ



黄河の源は、青海省のバインリン山脈にあり、長江に次いで中国最大の河川である。その流域は、中国の歴史と文化の中心地であり、古くから農業と交通の要路として発展してきた。黄河は、しばしば「母親の河」として愛され、その豊かな水は、数代にわたる中国人の生活を支えてきた。

母なる流れ



黄河は、中国の歴史と文化の中心地であり、古くから農業と交通の要路として発展してきた。黄河は、しばしば「母親の河」として愛され、その豊かな水は、数代にわたる中国人の生活を支えてきた。

「歴史のみこむ母なる流れ」の初出は一九八五・五・二四付読売新聞夕刊で、6面と7面に跨がった大きな記事です。イラストが面白いので、ここに転載します。



www.bing.com より

正面、池を渡って石段を登ったところが軒轅廟の廟門で、門を入ったところの木立が陵墓区で黄帝陵があります。その上の大きな建物が軒轅廟と祭祀大殿です。

「黄帝陵を訪ねて」補足

「黄帝陵を訪ねて」から引用します。

黄帝は伝説上の聖天子で、「史記」によれば姓は公孫、名は軒轅で、崩じて橋山に葬られたという。陝西省黄陵县(もと中部県)橋山がその地とされている。

橋山の墳丘は小さい。黄帝は龍にのって昇天し、人びとがその衣冠を葬ったという伝説がある。山麓に軒轅廟があり……

伝説上の人物といながら、『史記』に記述があるので、「史実では」との思いもあります。

黄陵县は延安市の一番南に位置します。

『含笑花の木』 各編内容(Ⅱ)及び補足

Ⅱ	答礼宴にて	1979年、王府井で、お世話になった作家協会の人たちへの答礼の宴をひらく
	茅盾さんのこと	1977年、北京の病院で作家・茅盾さん(ぼうじゅん 1896-1981)を見かける
	巴金氏と会う	1981年、北京のホテルで作家・巴金氏(はきん パキン 1904-2005)に会う
	「家」の公演によせて	巴金の代表作の一つ『家』は、中国の悩み、中国の若者の悩みを誠実にえがいている
	涙多き取材旅行	「大陸と台湾との離散家族が再会できるのはいつの日だろうか」
	苦渋にしたり落ちる汗 —竹内好『日本と中国のあいだ』—	竹内好著『日本と中国のあいだ』(文藝春秋 1973)を素材にしたエッセイという注文を受けて執筆
	武田泰淳、竹内好、増田渉 の三氏を悼む	増田渉(わたる)、中国文学者。晩年の魯迅に会い師事。三人は最も親しい同志であり盟友で、その友情は中国そして魯迅で強く結ばれていた
	井上さんと歴史小説	井上靖さんは日本文壇最大の旅行家
	司馬曼陀羅	いま司馬遼太郎はその歴史の世界の曼陀羅を制作中である

学芸

中国、そして魯迅で結ばれた友情

世話役の神大の山田敬三君から電話があった。

そこへ新しい

武田泰淳、竹内好、増田渉の三氏を悼む

陳舜臣

「武田泰淳、竹内好、…」

私(橘)たちは、舞子学院を会場に、山田敬三先生ご指導のもと、「みんなて読もう陳舜臣」という読書会を開いています。

左の新聞記事(一九七七・三・一一付毎日新聞夕刊)、「武田泰淳、竹内好、増田渉の三氏を悼む」の記事のなかに山田先生の名が出ています。

山田先生は、中国、そして魯迅に繋がる著名人たちと時間を共有した時期を経験されているのです。

「井上さんと歴史小説」

「井上さんと歴史小説」から引用します。

歴史小説家は大旅行家であらねばならないということである。「史記」を書いた司馬遷が、当時にあつては、想像を絶する大旅行家であったことを、私はいつも思い出す。歴史は時間だけではなく、空間とも密接にかかわっているのだ。

陳舜臣さんの度々の西域旅行から、右の記述、傍線部分にかなりのこだわりを感じます。

『含笑花の木』(Ⅳ) 補足

題
『中国 風土と文明』日本語版によせて
陸文夫『美食家』日本語版によせて
蔡子民『唐詩旅情』によせて
道教雑感—ジョン・ブロフェルド『道教の神秘と魔術』—
稲畑耕一郎『一勺の水』書評
李順然『わたしの北京風物誌』によせて
子槻清明『魅せられてインド』によせて



陸文夫『美食家』

陳舜臣さんご夫妻に『美味方丈記』というエッセイがある。陸文夫著『美食家』もそのような本かと思つていたら、こちらは、蘇州を舞台にした小説で、陳さんの弟・謙臣さんの日本語訳がある。

これらエッセイ、標題の著書刊行時に陳舜臣さんが書いた「序」、「はじめに」、あるいは書評をそのまま転載したものがほとんどです。

『道教の神秘と…』

ジョン・ブロフェルド著『道教の神秘と魔術』(ABC出版)は左上の画像のとおり、陳舜臣監訳で、同著冒頭、陳さんの「はじめに」という十三頁に及ぶ長い文章がついている。この「はじめに」がそっくり「道教雑感—ジョン・ブロフェルド『道教の神秘と魔術』」として『含笑花の木』に収録されているのだ。

『含笑花の木』（Ⅲ）補足

Ⅲ	神戸の魅力
	『青雲の軸』雑談
	ヘディンと『シルクロード』-青春の一冊-
	二足の草鞋-処女作のころ-
	海をながめて
	私の海と空
	走ること
	百万ドルの夜景
	含笑花の木
	紳士の時代の終焉
	名人の話と前置き
	国際化された料理
	茶館復活
	屠蘇
	声と活字と
	会議
	女性進出の起伏
	天知る、地知る
	私の宰相論
	政治は倫理の「技術」
旧暦の効用	
「平成」雑感	

文化

二十四節気

田舎の文化、季節の文化、生活の文化、そして、その文化の継承と発展。その文化の歴史と現状、そして、その文化の未来。その文化の歴史と現状、そして、その文化の未来。

旧暦の効用

◎旧正月

田舎の文化、季節の文化、生活の文化、そして、その文化の継承と発展。その文化の歴史と現状、そして、その文化の未来。その文化の歴史と現状、そして、その文化の未来。

文化

満月

田舎の文化、季節の文化、生活の文化、そして、その文化の継承と発展。その文化の歴史と現状、そして、その文化の未来。その文化の歴史と現状、そして、その文化の未来。

「陰と陽すくれた調整 長い歴史、行事にも残る」

◎満月

田舎の文化、季節の文化、生活の文化、そして、その文化の継承と発展。その文化の歴史と現状、そして、その文化の未来。その文化の歴史と現状、そして、その文化の未来。

「旧暦の効用」補足

『含笑花の木』収録、「旧暦の効用」の初出は、上掲記事のとおり、一九八五・二・五付読売新聞夕刊です。

「含笑花の木」補足

「含笑花の木」については、『含笑花の木』の題名となっていることもあり、本号一頁で取り上げ、画像も併せて載せていますのでご覧ください。

「青雲の軸」雑談」補足

このエッセイは、海岸通三丁目にあった、装甲ビルと呼ばれた「新瑞興」の社屋について記したものです。本通信No.91をご覧ください。

「神戸の魅力」補足

「神戸の魅力」から抜粋引用します。

小学生のころ、図画の時間に、よく屋上で写生をさせられた。私が通っていた神戸小学校は、ちょうど県庁の前にあり…。

私たちの図画の先生は、のちに作家になって、その道でも私の先輩になった若杉慧氏であった。

南にむかって海を描くとき、かならずいれなければならぬのは、川崎造船所のガントリー・クレーンで…。

北にむかって山を描くとき、



右はトア・ホテル 田井玲子『外国人居留地と神戸』より

「二足の草鞋」補足

『枯草の根』で江戸川乱歩賞を受賞した翌年、三作目の長編『弓の部屋』は蹟が長く、体重がどんどん減り、一四十キロを割れば小説をやめると奥さんに約束させられる…。

それから四半世紀、陳さんは、体重が五十七、八キロになったこともあり、運動不足解消のため、神戸新聞会館のボーリング場の会員になった。ところが、数回通っただけでやめる羽目に…。そのわけは？是非一読を。

私（橋）が大学を出て社会人になったのはその頃で、ボーリング熱が凄く、中山律子（私と同年）というスターが誕生しました。

「二足の草鞋」補足

かならず画用紙のどこかに描かねばならなかったのは、トア・ホテルであった。

はげしい空襲にもかかわらず、木造のトア・ホテルが消失を免れたのは、奇跡といってよかった。戦後、そこはアメリカ軍将兵の宿舎となった。誰かが酔っ払って、ストーブを蹴とばしたのであろう。戦後まもなく、失火でその優美な姿を消した。